日本語における表記形態が単語の内包的意味に及ぼす影響

杉島　一郎・賀集　寛

日本語は，物事を表すのに漢字，ひらがな，カタカナという3つの表記形態[1]を用いる。日本語の表記形態の多用性は，欧米語と比べてきわめて興味深い様相を呈している。

日本語の表記に関する読語過程の研究の多くは，漢字は表意文字であるのに対して仮名は表音文字であるという表記法の違いをもとに，表記形態の違いによる語彙への接近過程（process of lexical access）について調べられてきた（e.g., 斉藤，1981）。しかし，表記形態を考える際，表記法だけでなく，その語をどの表記形態で目にすることが多いのかという表記頻度についても検討する必要がある。広瀬（1984）は，低頻度仮名表記語と高頻度仮名表記語を用いて，漢字表記語との語の意味への接近過程を比較した。その結果，仮名表記語と漢字表記語の反応時間の差は，表記頻度の差をも反映していることが示唆された。また浮田・皆川・杉島・賀集（1991 a）は，表記頻度による語の読解過程を調べる上で重要となる単語の主観的表記頻度について，単語の表記頻度の標準化を試みた。彼らは，日常物品名の中で，具体的に指し示すことができ，漢字・ひらがな・カタカナの3表記形態で表すことのできる119個の単語に対して，被験者の主観による出現頻度と表記の適切さを，それぞれの表記において独立に評定させた。その結果，用いた材料の主観的出現頻度の高さによって，並立型・漢字型・ひらがな型・カタカナ型などに分類することができた。

(1) 本論文において，特に説明のない場合，漢字・ひらがな・カタカナという表記の違いについては表記形態という語を用い，漢字と仮名といった，属性上の表記の違いについては表記法という語を用いることにする。

また，彼らは語彙判断課題における反応時間が，主観的出現頻度の影響を受けることを示す研究も行っている（浮田・皆川・杉島・賀集，1991 b）。

ところで，以上の諸研究では表記形態間の処理の違いについては詳しく取り上げられているが，表記形態の違いが意味内容，特に内包的（情緒的）意味に影響するかどうかについては考慮されていない。ある語の読みが同じであれば，表記形態が異なっていても全く同じ意味内容を持つと言えるのであろうか。

本研究は，語の内包的意味が，表記形態によって異なるのかどうかを，これを測定する代表的な方法とされている semantic differential 法（SD 法；Osgood et al., 1957[3]）を用いて検討した。また，この際，表記頻度の語の持つ内包的意味に対する影響の可能性についても，併せて検討した。

方　　法

1　実験場所

実験は，関西学院大学の一般教育課程の授業を利用して実施した。

2　被験者

同講義受講者94名中，評定において一部の評定対象を評定していない等の不備のあったものを除く85名（男性60名，女性25名）平均年齢19.67歳，年齢範囲［18-23歳］を用いた。

3　材料

a）評定概念

SD 法の評定概念として，浮田ら（1991 a）において分類されている主観的出現頻度の分類型をもとに，並立型（3つの表記のいずれもが50％以上の被験

(2) SD 法とは，あるコンセプトに対して，多数の形容詞対からなる評定尺度によって，その意味を表現しようとする方法である。Osgood（1952）によって提案され，Osgood, Suci, and Tannenbaum（1957）で定式化された手法である。

者によってよく見ると判断されたもの）・漢字型（よく見ると答えた比率が，漢字表記が70％以上で他の表記が50％以下であったもの）・ひらがな型（よく見ると答えた比率が，ひらがな表記が70％以上で他の表記が50％以下であったもの）・カタカナ型（よく見ると答えた比率が，カタカナ表記が70％以上で他の表記が50％以下であったもの）より選出した10項目の日常物品名の３表記を用いた。これらの材料は，並立型が椅子，いす，イス，煙草，たばこ，タバコ，眼鏡，めがね，メガネ，漢字型が時計，とけい，トケイ，灰皿，はいざら，ハイザラ，本，ほん，ホン，ひらがな型が布団，ふとん，フトン，割箸，わりばし，ワリバシ，物差，ものさし，モノサシ，カタカナ型が剃刀，かみそり，カミソリであった。カタカナ型のみ１項目となったのは，浮田ら（1991 a）においてカタカナ型に分類された項目が「かみそり」のみであったためである。

b）評定尺度

SD 法の評定尺度として用いた形容詞対は，森本（1987）で用いられている，一般的に Osgood（1957）の示した意味の３空間次元（E，P，A）を表すのにふさわしいとされている11形容詞対，すなわち，評価性次元（evaluation dimension；E 次元）として「気持ちのよい―気持ちの悪い」，「きれい―きたない」，「悪い―よい」，「たよりない―たのもしい」，「好きな―きらいな」の５形容詞対，力量性次元（potency dimension；P 次元）として「小さい―大きい」，「かたい―やわらかい」，「男性的―女性的」の３形容詞対，及び活動性次元（activity dimension；A 次元）として「浅い―深い」，「はやい―おそい」，「しずかな―うるさい」の３形容詞対を用いた。それらに加えて海保・犬飼（1982）で用いられた漢字の形態尺度の内，４形容詞対，すなわち，「複雑な―単純な」，「ばらばらな―まとまった」，「丸まった―角ばった」，「安定な―不安定な」の合計15形容詞対を評定に用いた。すべての尺度は井上・小林（1985）で，SD 法に用いるのに妥当であるされているものであった。

c）評定用紙

これらの材料をもとに評定用紙を作成した。用紙は１概念毎に１枚を使い，上部の中央に横書きで概念が示されていた。その下に評定尺度として形容詞対

い　す

	1	2	3	4	5	6	7	
気持ちのよい								気持ちの悪い
大きい								小さい
浅い								深い
単純な								複雑な
好きな								きらいな
かたい								やわらかい
きたない								きれい
女性的								男性的
おそい								はやい
ばらばらな								まとまった
しずかな								うるさい
悪い								よい
角ばった								丸まった
たのもしい								たよりない
安定な								不安定な

Fig. 1. 評定用紙の一例

が横書きで左右に示され，その間に７段階の尺度が示された15対の評定尺度が印刷されていた。評定用紙の一例を Fig. 1 に示した。形容詞対の順序は評定用紙毎に同じ因子が重ならないように配慮されており，左右はカウンターバランスされていた。評定用紙は各表記形態毎に組み合わされており，各表記内でランダムな順序に並べられていた。また，各表記形態の評定順序はカウンターバランスされていた。評定用冊子はＡ５判33ページからなり，教示の書かれた表紙１ページ，一つの表記形態についての評定用紙10ページ，表記形態が変わることを示す用紙１ページをはさんで次の表記形態についての評定用紙10ペ

ージ，表記形態が変わることを示す用紙1ページ，残りの表記形態についての評定用紙10ページの順で構成されていた。

4　手続き

被験者毎に冊子を1冊ずつ配布した。その際に指示があるまで冊子を開かないように，また，表紙の教示文をよく読むように告げた。教示文には，1）同じ事物が漢字，ひらがな，カタカナの3つの表記で書かれているのを目にしたとき，人はどのような印象を受けるかを調べることが目的であること，2）ある表記法で書かれた事物があなたにとってどのような意味を持つのかを考えること，3）冊子の各ページの上部に，判断の対象となる事物が記されており，その下に印刷された形容詞を両端に付けた15個の尺度について「この程度である」と思われる軸の上に「○」を記入することによって，その意味を表現すること，4）冊子は10ページごとに3つのブロックに分かれ，ブロックごとに判断対象の表記法が変わり，10種類の事物名が漢字，ひらがな，カタカナと表記法を変えて3回ずつ出てくることになること，5）判断はそれぞれ別個に行い，前にやったところを見直したり，先の方を見たりしないこと，6）直観的な感じで答えることが示されていた。冊子の配布後，口頭で教示の要点を説明した。

評定は被験者ペースで行われた。評定に要した時間は平均約15分であった。

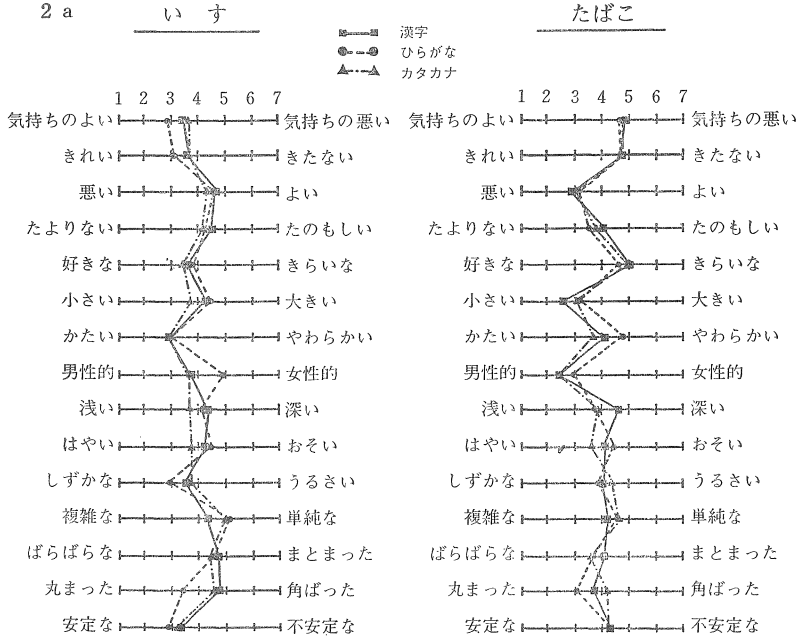
結果および考察

プロフィールの比較

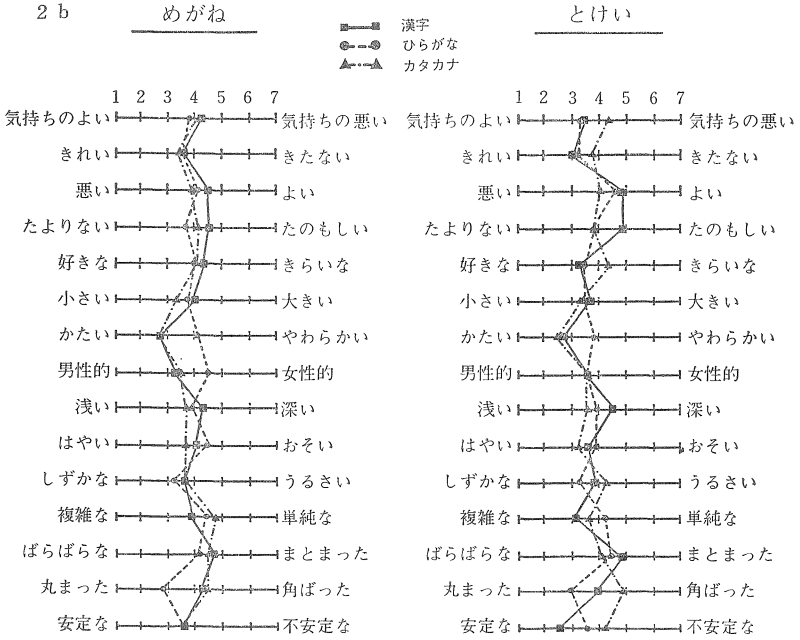
各項目の評定結果より，各尺度の得点を最もポジティブなものを1最もネガティブなものを7として平均得点を求めた。各尺度の平均得点をもとに，各項目毎のプロフィールを表したのが Fig. 2 a～e である。

浮田ら(1991 a)の分類による表記型毎に，表記形態間のプロフィールの差異について観察した。並立型（いす，たばこ，めがね）は，表記間でプロフィー

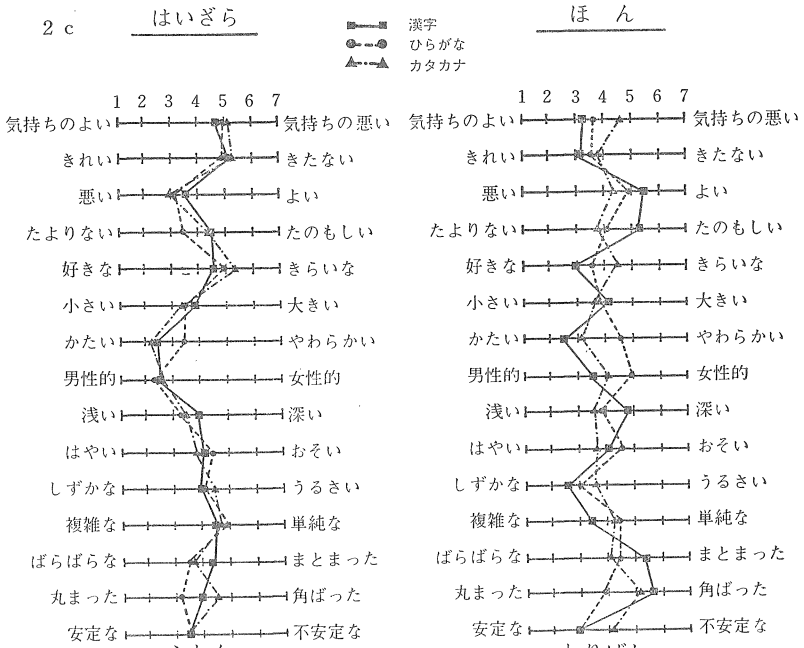
2 a


い　す
たばこ
漢字
ひらがな
カタカナ
1 2 3 4 5 6 7
気持ちのよい
気持ちの悪い
きれい
きたない
悪い
よい
たよりない
たのもしい
好きな
きらいな
小さい
大きい
かたい
やわらかい
男性的
女性的
浅い
深い
はやい
おそい
しずかな
うるさい
複雑な
単純な
ばらばらな
まとまった
丸まった
角ばった
安定な
不安定な

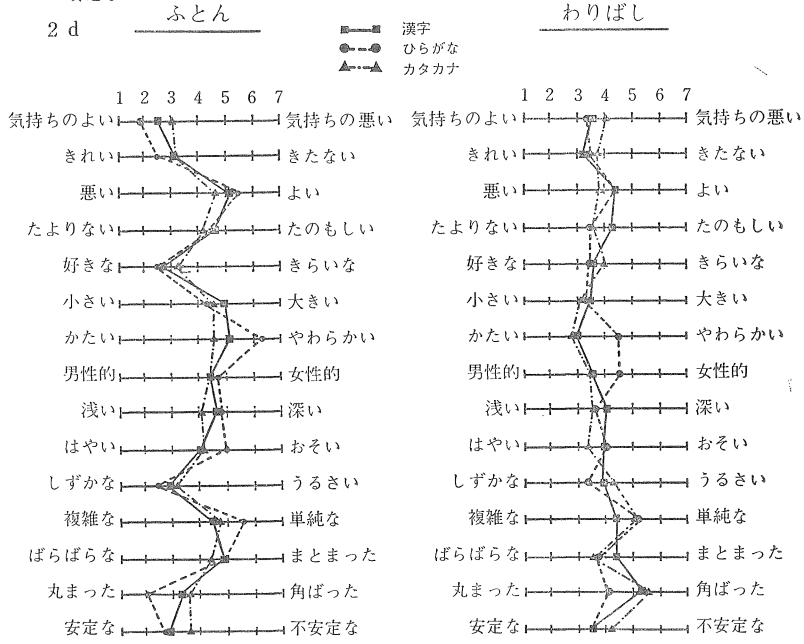
2 b


めがね
とけい
漢字
ひらがな
カタカナ
1 2 3 4 5 6 7
気持ちのよい
気持ちの悪い
きれい
きたない
悪い
よい
たよりない
たのもしい
好きな
きらいな
小さい
大きい
かたい
やわらかい
男性的
女性的
浅い
深い
はやい
おそい
しずかな
うるさい
複雑な
単純な
ばらばらな
まとまった
丸まった
角ばった
安定な
不安定な

2 c


はいざら
ほ　ん
漢字
ひらがな
カタカナ
1 2 3 4 5 6 7
気持ちのよい
気持ちの悪い
きれい
きたない
悪い
よい
たよりない
たのもしい
好きな
きらいな
小さい
大きい
かたい
やわらかい
男性的
女性的
浅い
深い
はやい
おそい
しずかな
うるさい
複雑な
単純な
ばらばらな
まとまった
丸まった
角ばった
安定な
不安定な

2 d


ふとん
わりばし
漢字
ひらがな
カタカナ
1 2 3 4 5 6 7
気持ちのよい
気持ちの悪い
きれい
きたない
悪い
よい
たよりない
たのもしい
好きな
きらいな
小さい
大きい
かたい
やわらかい
男性的
女性的
浅い
深い
はやい
おそい
しずかな
うるさい
複雑な
単純な
ばらばらな
まとまった
丸まった
角ばった
安定な
不安定な

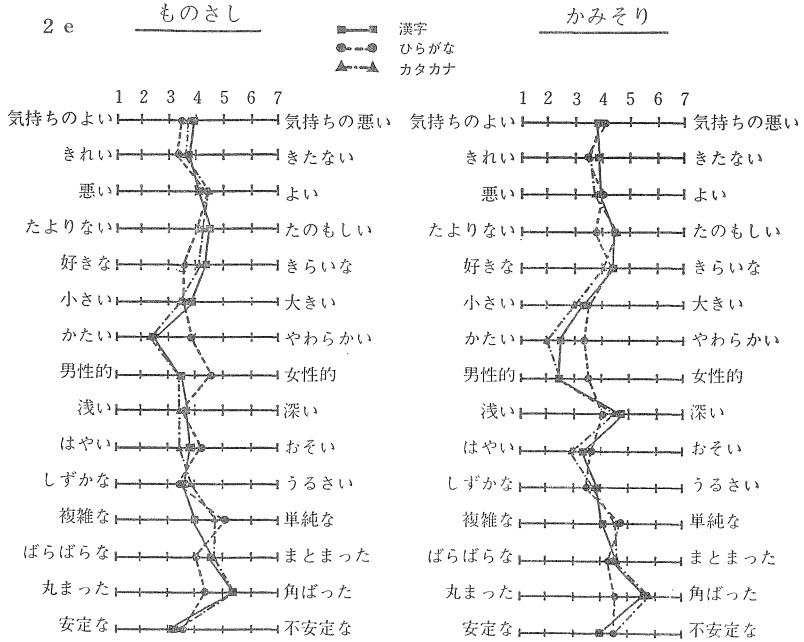


Fig. 2a　各項目毎のプロフィール（いす，たばこ）
Fig. 2b　各項目毎のプロフィール（めがね，とけい）
Fig. 2c　各項目毎のプロフィール（はいざら，ほん）
Fig. 2d　各項目毎のプロフィール（ふとん，わりばし）
Fig. 2e　各項目毎のプロフィール（ものさし，かみそり）

ルにあまり違いはなかった。特に“たばこ”に関しては，各表記形態ともほぼ同じであった。ただし，“めがね”では，「かたい―やわらかい」，「男性的―女性的」，「丸まった―角ばった」などの評定尺度において，ひらがな表記が他の２つの表記と目だって異なっていた。漢字型（とけい，はいざら，ほん）は，並立型に比べると表記毎のプロフィールが異なるものであった。特に“とけい”と“ほん”では主観的出現頻度の高い漢字表記に対して，他の２つの表記よりも，各尺度においてより両端に近づくような評定（１あるいは７に近い評定）がなされていた。これは，見慣れた表記形態（この場合は漢字）では指示物の内包的意味がつかみやすくなることを反映していると解釈できる。また，主観的出現頻度の低いひらがな表記とカタカナ表記のプロフィールに注目する

Table 1. 各概念に対する各評定尺度の平均評定得点の分散分析結果

	表記形態の主効果	評定尺度の主効果	交互作用
いす			
F-value (df)	1.26 (2,168)	31.36 (14,1176)	9.82 (28,2352)
probability	n. s.	p<.001	p<.001
たばこ			
F-value (df)	0.86 (2,168)	28.76 (14,1176)	5.92 (28,2352)
probability	n. s.	p<.001	p<.001
めがね			
F-value (df)	3.09 (2,168)	13.52 (14,1176)	10.78 (28,2352)
probability	p<.10†	p<.001	p<.001
とけい			
F-value (df)	2.78 (2,168)	16.93 (14,1176)	10.56 (28,2352)
probability	p<.10†	p<.001	p<.001
はいざら			
F-value (df)	0.46 (2,168)	43.89 (14,1176)	8.87 (28,2352)
probability	n. s.	p<.001	p<.001
ほん			
F-value (df)	2.14 (2,168)	26.40 (14,1176)	19.61 (28,2352)
probability	n. s.	p<.001	p<.001
ふとん			
F-value (df)	5.21 (2,168)	92.40 (14,1176)	14.93 (28,2352)
probability	p<.01	p<.001	p<.001
わりばし			
F-value (df)	0.73 (2,168)	24.70 (14,1176)	13.56 (28,2352)
probability	n. s.	p<.001	p<.001
ものさし			
F-value (df)	0.25 (2,168)	35.52 (14,1176)	9.31 (28,2352)
probability	n. s.	p<.001	p<.001
かみそり			
F-value (df)	4.64 (2,168)	39.23 (14,1176)	7.65 (28,2352)
probability	p<.05	p<.001	p<.001

NOTE：†は，傾向を表す。

と，各尺度毎に異なった傾向を示していた。ひらがな型（ふとん，わりばし，ものさし）も，並立型に比べて３表記間で評定が異なっていた。主観的出現頻度の高いひらがな表記のプロフィールは，他の２つの表記に比べ各尺度の評定がより両端に位置していた。ひらがな型は漢字型と異なり，主観的出現頻度の低い漢字表記とカタカナ表記のプロフィールが，それぞれの項目で類似したものであった。カタカナ型（かみそり）は，高頻度であるカタカナ表記と低頻度である漢字表記のプロフィールが似かよっており，同じ表音文字である平仮名表記が異なったものとなっていた。また，ひらがな表記は他の表記に比べて，より中間値に近い評定がなされていた。

プロフィール上で観察された表記間での差を確認するために，それぞれの項目毎に，３（表記形態）×15（評定尺度）の分散分析を行った。検定結果を示したものが，Table 1 である。表記間の主効果がみられたのは，ひらがな型の“ふとん”カタカナ型の“かみそり”について のみであった。並立型の“めがね”と漢字型の“とけい”は，傾向としてみられたが，他の項目については主効果はみられなかった。しかし，表記形態と評定尺度との間の交互作用がいずれの項目においてもみられたことから，少なくとも，同じ項目であっても表記形態が異なれば，そこから受ける イメージは 異なっていたと解釈できる。また，プロフィール上の観察についても，表記間の差異を論じることは，ある程度妥当であるといえる。

E，P，A ３ 次元上での比較

本実験で用いた評定尺度のうち，森本（1987）より選んだ11対は標準的に意味空間を表す３次元（評価性次元Ｅ，力量性次元Ｐ，活動性次元Ａ）を示すものであるので，これら11尺度をもとに次元毎の平均評定得点を算出した。各項目毎に平均評定得点の３次元図を示したのが Fig. 3 である。また，表記型毎の平均評定得点を示したのが Fig. 4 である。

個々の位置関係を表記型ごとに観察した。並立型は，漢字表記とカタカナ表記が似かよっているが，ひらがな表記は他の２つの表記とは異なる意味を持つ

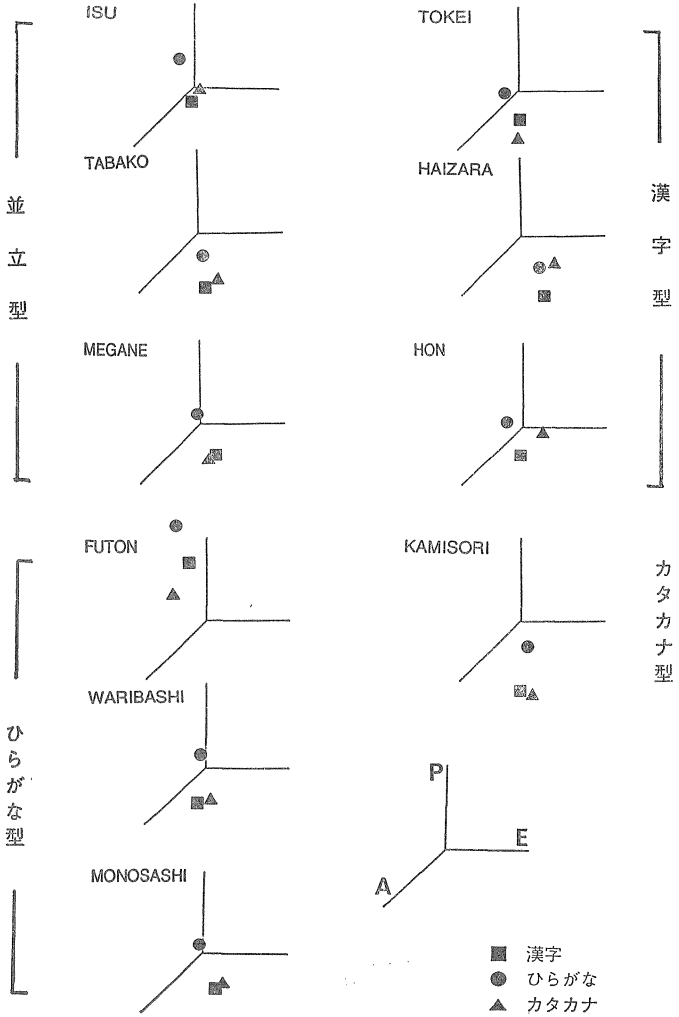


Fig. 3. 各項目毎の E, P, A 次元上における 3 次元図

ような位置にあった。漢字型では，3 表記が異なる方向に位置していた。また，他の表記型では 3 つの表記が縦一列，つまりP次元上に並びやすい傾向があったが，漢字型は例外的に縦横どちらの方向にも散らばっていた。ひらがな

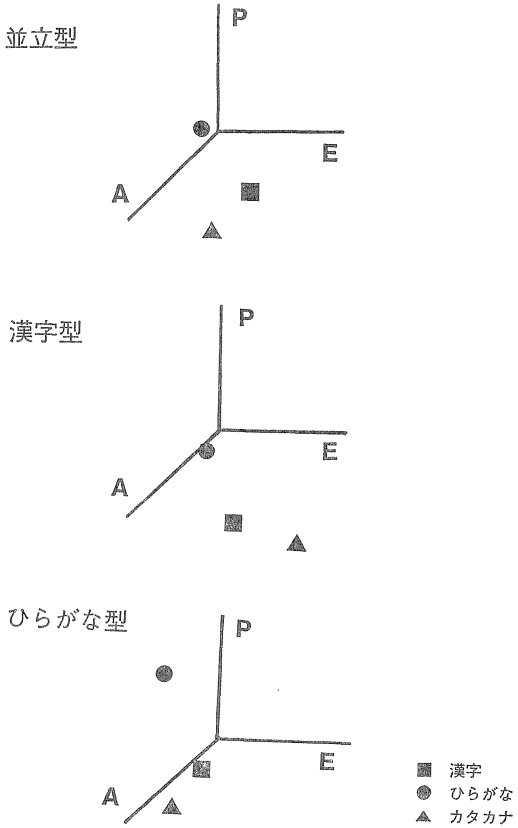


Fig. 4. E, P, A 各次元における各表記型毎の平均評定得点

型は，並立型と同様の傾向を示したが，主観的出現頻度の高いひらがな表記が，漢字表記やカタカナ表記に対してより離れたところに位置していた。特に，“わりばし”，“ものさし”はこの傾向が顕著であった。カタカナ型では，ひらがな表記が漢字表記およびカタカナ表記と離れた位置にきており，漢字表記とカタカナ表記が似かよった位置にきていた。

11尺度上でのDスコア

表記頻度の影響が3表記間の意味の違いに反映しているのではないかと考え

Table 2. 各表記型毎の11尺度における3表記間のDスコア

	漢字—ひらがな	漢字—カタカナ	ひらがな—カタカナ
並立型平均	5.354	5.102	5.511
漢字型平均	5.701	6.023	5.989
ひらがな型平均	5.402	5.287	5.992
カタカナ型	5.725	5.112	5.771
全体の平均	5.510	5.435	5.825

られるため，E, P, A 各次元を表す11尺度の平均評定得点をもとに，各表記型毎に表記間のDスコア(3)の平均を示したのが Table 2 である。並立型は，3表記間のDスコアが全体の平均を下回っていた。漢字型は，3表記間のDスコアが大きくなっていた。ひらがな型は，主観的出現頻度の高いひらがな表記が，漢字表記やカタカナ表記に対して離れていた。特に，“わりばし”，“ものさし”はこの傾向が顕著であった。カタカナ型は漢字表記とカタカナ表記が近い意味を持ち，ひらがな表記が他の2つの表記と異なった意味を持っていた。

考察

全体から見られるものとして，ひらがな表記は漢字表記，カタカナ表記に比べ，概してP次元の正方向にあり，表記間の差がP次元で顕著であると考えられる。漢字表記とカタカナ表記が似かよっており，ひらがな表記の特異性を示す項目が多くみられた。皆川・賀集（1991）は，花の名前に関して表記形態による情緒的意味の研究をSD法を用いて行なっているが，彼らの研究でも，漢字表記とカタカナ表記は似かよっており，ひらがな表記が異なるという本研究と一致する結果を示している。

これは，以下にのべるような各表記形態に固有の視覚的要素が，内包的意味の評定に影響した結果であると解釈される。

漢字表記とカタカナ表記が近い評定がなされたのは，漢字表記とカタカナ表

(3) Dスコア（distant score）とは，各コンセプト間の距離関係を，立体幾何学の距離公式を借用して，数値化したものである。

記が似かよった特性を有しているためと解釈される。片や表意文字であり，片や表音文字である漢字とカタカナが類似した評定がなされ，同じ表音文字であるひらがなとカタカナは異なった評定がなされたのは，非常に興味のあるものである。この現象は，ひらがなは丸みを帯びたものが多く，漢字とカタカナは直線と角で構成されたものが多いという視覚的差異が影響しているものと考えられる。「丸まった一角ばった」の評定において，漢字とカタカナが似かよっており，ひらがなが異なった評定がなされることを顕著に示す項目が多かったこと（平均評定値：漢字4.64，ひらがな3.39，カタカナ4.93）も，そのことを裏付けるものである。歴史上，漢字は外来語であり，カタカナは外来語である漢字の一部を使って出来たものである。それに対して，ひらがなは漢字をもとにしていると言えるが，日本人の手によってデザインされたものである。成立時の文化的な好みの違いが反映したものであるかもしれない。

全体的にみられた漢字表記とカタカナ表記が似かより，ひらがな表記が異なるという傾向は，必ずしもすべての項目でみられたわけではなかった。特に漢字型では，これは主観的表記頻度が影響していることを示唆するものといえる。もし，主観的出現頻度が単語の内包的意味に影響をもたらすのであれば，並立型は３つの表記間の意味の距離は等しく近いものとなり，漢字型，ひらがな型，カタカナ型は，主観的出現頻度の高い表記と主観的出現頻度の低い他の２つの表記が離れた位置にくると予想される。各表記型における３表記形態の評定の位置関係と距離は，並立型，漢字型，ひらがな型に関しては主観的出現頻度を反映するものと解釈できるものであった。しかし，カタカナ型は，仮説を支持する結果とはなっていなかった。

これらのことを考慮すると，表記形態による単語の内包的意味の抽出には，表記頻度とともに，表記形態自体の視覚的特徴が影響を与えると解釈される。

要約及び結論

本研究は，表記形態間の内包的意味の差異をSD法を用いて検討した。その結果，同一項目であっても表記形態が異なると，語の持つ内包的意味が異なることが示唆された。

表記形態間において評定の差異が生じた原因として，主に2つの可能性が示唆された。一つは，表記頻度が語の内包的意味のとらえ方に影響を及ぼす可能性であった。広瀬（1984）や浮田ら（1991ａ）のいうように，表記間研究を行う上で，その表記で目にする頻度が重要な要因となることが示唆された。もう1つは，表記形態に固有の視覚的特徴が内包的意味の抽出に影響を及ぼす可能性であった。つまり，漢字には漢字の，ひらがなにはひらがなの，カタカナにはカタカナの持つ特徴が内包的意味に影響するというものであった。この要因は，表記形態の持つ視覚的特性に由来するもの解釈されるものであった。

しかし，本研究では，対象にした項目は10種類にすぎず，それぞれの表記型から3項目ずつ，カタカナ型は1項目しか用いていなかった。今後，より多くの項目で，表記間の内包的意味の差異を確かめる必要がある。また，本研究では，同じ被験者が3表記全てを評定していたため，表記形態間の差異に注意を向けることになり，自然な状態での評定を行っているとは言えないものであった。その語から受けるイメージをより純粋にとらえさせるためには，表記間の比較を，被験者間要因で行うことも必要である。また，評定させた項目が，日常物品名という大きなカテゴリーのものであったため，評定に臨む被験者にとって，評定基準をつくりにくかった可能性があり，より限定したカテゴリーでの実験が望まれる。

本実験の結果の一部は，1991年の日本心理学会第55回大会（於東北大学）で発表された。

引 用 文 献

広瀬雄彦　1984　漢字および仮名の意味的処理に及ぼす表記頻度の効果　心理学研究, 55, 73-176.

井上正明・小林利宣　1985　日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観　教育心理学研究, 33, 253-260.

海保博之・犬飼幸男　1982　教育漢字の概形特徴の心理学的分析　心理学研究, 53, 257-260.

皆川直凡・賀集　寛　1991　言語表現の心情的・共感的理解に関する研究―俳句の季語の表記形態による情緒的意味の変動―　関西心理学会第103回大会発表論文集.

森本　博　1987　Semantic Differential 法による漢字の分析―(8)―　神戸山手女子短期大学紀要, 30, 41-55.

Osgood, C. E. 1952　The nature and measurement of meaning. *Psychological Bullitin*, 49, 197-237.

Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H. 1957　*The measurement of meaning*. Univ. of Illinois Press.

斎藤洋典　1981　漢字と仮名の読みにおける形態的符号化及び音韻的符号化の検討　心理学研究, 52, 266-273.

浮田　潤・皆川直凡・杉島一郎・賀集　寛　1991 a　日常物品名の表記形態に関する研究―各表記の主観的出現頻度と適切性についての 評定―　人文論究, 40, 11-261991.

浮田　潤・皆川直凡・杉島一郎・賀集　寛　1991 b　日常物品名の表記形態に関する研究(4)―ひらがな文字列の語彙判断課題に及ぼす表記型の効果―　日本心理学会第55回大会発表論文集.

――杉島一郎　大学院博士課程後期課程――
――賀集　寛　文学部教授――